

環境科学部 17年の思い出とこれから

松岡 拓公雄
環境建築デザイン学科

公募で環境科学部の助教授に応募し、選考され就任して以来、17年間という年月があつという間に過ぎ去った。当時、公募の面接試験には故内井昭蔵先生がいらして、その時の質問が忘れられない。「松岡さん、今、建築家として脂が乗っているあなたが、何故この大学に来られるのか」と、何故ってなんだ、その質問は陳腐だと思い、その返答もまたあまりも陳腐だったかもしれない。「内井先生がこの大学にいらっしゃる気持ちと同じだと思います。」むっとしたので答えになっていなかったがそういい切った、沈黙がありその後、内井先生は大声をあげて笑われた。面接はそれで終わり失敗したな、これでだめでも仕方ないかと、琵琶湖の雄大な夕陽を背に帰京した。3月3日に、歯医者で親不知を抜いたばかり、まだ麻酔がきいているところに携帯へ連絡があり、「来ていただけますか」と、故人となられた藤原梯三学科長からの電話、麻痺してきちんと口が動かし思わず「へえ」と答えた。その一ヶ月後には、國松県知事から辞令を受け取り、教壇に立っていた。その際一緒に一緒にいたのが今の学長の大田先生であり、二人だけだった。それ以来、大学生活は単身赴任となり、生活環境が大きく変わり、滋賀と教員、学生らとの長いつきあいが始まる。

なにしろ、環境科学部の中に建築学科があるというのが最大の魅力だった。東京芸大で建築を学び、工学系とは違う西欧に近い建築家教育を受けていた私は、当時建築教育に疑問を持ち始めていたところで、建築教育のあり方そのものが環境科学部の理念とリンクし、勇んで滋賀県に向わせた。隣の学科に生態や資源がある、建築は環境の総体として語らねばならないと、これはしばらく段階的フィールドワークとも合わせて学外での自慢のネタでもあった。

逆から読んで「ダンケツマツケンダ」の結成で学生との共同調査や課題発見に重点をおいた活動がはじまり、地元集落調査の「チームハッケイ」を創り、かってに学生をつかまえては勧誘し、学部生から院生まで縦につなぎゼミとは違う研究室活動を増やして行っった。これはやがて「近江楽座」へとつながって行く。思えばこれが出発点だった。

初めての教壇に立ち、何故教員になったのかを熟弁した。この県大の学生が、教えがいがあるのか反応を見たかったが、さすがに全員、新鮮な話だったのか質問攻めにあった。その後、教壇にバースデー

ケーキが用意されサプライズをくれたり、研究室まで質問にくる学生が可愛くなり、建築教育にはまっで行った。懐かしいシーンが数多く思い出される。

演習授業では、すでに既存の方法で進められていた「イメージ表現法」の担当となり、このデザイン入門の演習授業は新人の私と非常勤の松本正先生に任されたので、その中身をがらりと変えて創造的な指導内容に全く刷新した。まずは二人で、建築の概念を手で覚える課題や、製図そのものを楽しむわくわくする課題、そして頭の中にあるイメージをどう表現させるか考える課題、個人でなくチームで当てる社会の縮図のような課題などいくつも湧き出る課題をひとつひとつ試して行っった。常に定着させつつも新たな試みを繰り返してきた。その発表会は毎回、お祭りのように盛り上がった。この演習授業はその後、卒業生に聞くと多くが、一番印象が強く楽しい授業だったと語ってくれている。

(中間省略)

教育の根幹にあるもの、それは故内井昭蔵先生が生み出した「デザインマインド」であり、それを私が引き継ぎ育ててきた。「デザインマインド」とは、われわれものづくり、環境造り、まちづくりに関わる者に必要な心構えのようなものである。ひととのや、社会、環境、政治、科学あらゆるものとの関係性を正しく見える形にするという事である。その背景には環境倫理もあり、公德心や人々の幸せを心から願う気持ちや社会への貢献等があり、私利私欲に走り、他の思惑を入れたのでは良いデザインはできないという教えである。流行はするかもしれないが不易にはならない、つまらないものだと言ってきた。つまり何の為にデザインするのかということをも学生たちにはしつこく話してきた。

この17年間は、総じて結果的に大学の柱である「地域貢献」に専念した。それをベースに「研究」「教育」の課題へとつなげて行っった。前半は文科省の現代GPである「近江楽座スチューデントファーム」や同じく文科省の地域再生人材育成プログラムの「近江環人」獲得に教員仲間と尽力した。両方とも私が命名させてもらったが的を得ていたと思う。この活動で東北の支援や県内の様々なまちづくりに参加し、学生の学びの場、また活躍できる場所は広がって行っ

た。地域創生人材育成に注力し、院生を送り込んだ「近江環人」の卒業生はマツケンが断トツに多いはずだ。ここで排出した学生たちも、今は地域に根ざして活発に活動を始め、根付いている者も多い。教育の「デザインマインド」が結果を現し嬉しいかぎりだ。後半は自治体等の審査員、各委員などが増えてくるが、一時期最高30件ぐらい抱えていた。これは大変だったので、その中から課題を見だし、いくつかを研究テーマとし、あるいは設計演習課題として取り込み、卒業設計、修士設計のテーマにも転化するなどして、一石三鳥以上を狙い、その効果があったと自負している。特に学部生の設計演習に取り込んで、実際に行政で計画、検討されている公共施設などを学生の手で提案させる方式は、双方にとって大きな利点があった。行政は無駄に予算を使わずにたたき台を検討できる、学生は実際に建設される課題を通して、そのプレゼンを行政マンの前で緊張しながら行い、外部評価を受け、やがて建設される本体を見て自分の提案と重ね合わせる事ができる。課題の教育効果は絶大で卒業後まで続いて行く。それが架空の課題を出すより、はるかに効果的だと考えた。また一歩前進して研究室の研究課題として行政と連携し、積極的にCOC事業のひとつとして続けて行く事にもなった。多い時には採択12課題の内4つを占める事もあった(代表はひとつしかできないので、ほかの代表は同僚の先生にお願いし、共同研究で進める方法をとった)。

大学内では内井昭蔵先生の後を継ぎ、二代目マスターアーキテクトとして、少しは貢献できたかと思う。人間看護学部の建築から始まり、工学部の電子システム学科棟と木造の新校舎は外部に頼らずインハウスで、同僚の先生と企画し、院生の演習課題として内部コンペにした。案を決め指導し、教育素材にしながら基本設計まで携わった。これは建築学科の無い大学ではできない事である。自転車置き場やサイン計画、防災かまどベンチなど常にコンペにして学生を巻き込んで実現してきた。校舎も20年を超え、傷みがでているが、これからはメンテナンスとの戦いもあるだろう。

建築や都市に関わる者として、一番楽しくやりがいがあるのは実作、実践に関わり実現させる事だ。それで賞をとるなり、学会や建築界で認知されることは建築家にとっての醍醐味である。しかし、教育の現場に長く関わり、二足の草鞋を履いて進むのは相当な体力がいることも実感してきた。教育にはまっていると作品の密度が下がる、作品に力を投入すると学生のつながりと教育が手薄になる。いつもその狭間で悩んできた。その悩みを経て、今は作品を造

り社会へ一石を投げ、波紋を広げるやり方よりも、多くの良い学生を育てる方が社会へ貢献度、建築活動の効果が高いと考えるに至っている。それが次への自分の展開の引き金にもなっていた。

当たり前の一日、日常を大事にしてきた。とはいえ、東京と滋賀の往復はこの間、1300回は超えている。都市と地方の二重生活をし、住み分けてきたが、得たもの、見えてきたものは大きい。都市と地方それぞれが良くなければ、共に生きなければ国土は成り立たない。そこで新たな道を選択した。縁があり「都市創造学部」の開設を東京の亜細亜大学で相談役として頼まれ、その内容を詰め深めていくうちに新たな自分の居場所にできると直感した。例えば人口流失など都市の問題はそのまま地方の問題となる。例えば日本版CCRC(Continuing Care Retirement Community)などがその例である。都市の様々な要素を活用し、都市社会学の視座に立ち、都市をさらに住みやすくして行くためにできることがある。アジア圏を視野に入れて、そのための人材を育成する事にこれからの人生を歩む事が自分に課せられた使命だと考えている。

県大での最初の教え子に人文の南政宏先生や、環境建築デザインの川井操先生がいた。今や教え子が大学に戻り同僚となり時の経過を強く感じている。積み重なった17年間に、在校生、卒業生のみなさん、大学の教員仲間、事務の方々の協力と楽しい時間を共有していただいた事に心から感謝している。後ろ髪を引かれる思いもあるが、東京では滋賀で得た経験は十分活かしていきたい、まだ滋賀との縁はつながっており、区切りがつくまでのものもあるが、一生大事にしていきたい。いつまでも大学にお世話になるわけにいかず早期退官となりご迷惑をおかけしたこと重々反省している。自分自身も修行を続けていかなければ止まってしまうのでご容赦願ひ、最後に重ねて感謝の意を表したい。

